様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２２１

研究課題名（和文）ユダヤ教における「デモクラティア」・「自由」の出現

研究課題名（英文）The Emergence of Democratia and Freedom in the Judaism

研究代表者
勝又　悦子（Katsumata, Etsuko）

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：６０３９９０４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ラビ・ユダヤ教文献、またそれらを解釈する19世紀のドイツ・ユダヤ学者の分析を通し、さほど「個人」としての「自由」には関心のないラビ・ユダヤ教文献に「民主性」（デモクラティア）や「自由」を見出したのは、近代ヨーロッパの価値観との競合の中で、一市民としての自立した地位を確立するために、「自由」と「民主性」を火急の課題としたドイツ・ユダヤ共同体の事情があったことが推察された。他方で、伝統的ユダヤ教では、個人としての「自由」の対極に金の子牛像に代表される「偶像崇拝」が置かれていることを指摘し、現代社会において当然視される「自由」概念の再検討に有用な枠組みを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学問の背景にはそれを分析する研究者、学者のおかれた状況に影響されることが明らかになった。他方で、近代ヨーロッパの価値観との競合の中で、真摯にユダヤ教の将来を危惧し、模索を続ける研究者の姿を明らかにした。さらに、伝統的なラビ・ユダヤ教文献における「自由」概念を分析することで、「自由」とは本来社会システムの中で運用される概念であること、また個としての「自由」を想定する際に、対極に偶像崇拝が連想されていることが指摘された。これは、特定のイデオロギーへの執着も含め、有形・無形の偶像に拘束されることの危険性を訴えるものであり、この視点は、近現代における「自由」の概念の再検討に資するものである。

研究成果の概要（英文）：My research revealed that the emphasis on the democratic aspects and freedom in the rabbinic traditional Jewish literature by the leading scholars of Wissenschaft des Judentumes (WJ) was due to their urgent need to achieve an equal status as a citizen in Modern German society.
“Hence, scholars of WJ, who in fact, pursued freedom and democracy out of their interest, had to find the roots of the democracy and freedom even in the rabbinic ages.” Nonetheless, it is significant that a few references to the private level freedom in traditional Jewish literature are always related to the episode involving the sin of the Golden Calf, in the book of Exodus. This implies that the danger of idolatry is the opposite of freedom, which is significant toward the concept of freedom in our age.

研究分野：ユダヤ学、宗教学

キーワード：自由　ユダヤ教　ドイツ・ユダヤ学　偶像崇拝　民主主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、2016 年は、世界各国で自由をめぐる紛争が頻発していた。代表的な事件が、2015 年 1 月シャルリー・エブド紙風刺画に端を発したテロ事件であり、イスラーム過激派の報復行動に抗議して「表現の自由」を訴える大々的なデモ行進が展開された。グローバル化が進み、欧米の「自由」「民主主義」の概念が世界規模に広がり、進展したかにみえた各地の社会改革が、各地で破綻を見せ始めた時代であった。現代の世界各地の紛争や事件において大義として語られるのが「デモクラシー」とその根底を支える「自由」である。一旦は全世界的に受容されたかにみえたこれらの価値が、つまり、様々な宗教、立場、価値観が交錯する中で、新たな問題を引き起こしている。以降、デモクラシーの本場である欧米でも、移民への嫌悪が蔓延し、自国中心主義、右傾化が進み、排他主義が横行する。近代精神が理想とした「自由」と「デモクラシー」の限界が露呈されてきた。

このような状況においては、それぞれの陣営が「デモクラシー」・「自由」に込めた意味を検証し、認識しあうことが必要である。特に中近東におけるアラブ世界の民主化の挫折の経緯は議論されるが、そもそも「デモクラシー」がアラブ・イスラーム世界に合致するのか、その概念検証は行われていない。ユダヤ教の中心であるイスラエルにおいては、「デモクラシー」は「デモクラティア」とヘブライ語化し、自分たちが「デモクラティア」・「自由」の体現者であると誇り高く語られるが、「デモクラティア」概念の形成について、またそれを支える「自由」概念の検証は行われてはいない。I．バーリン以降、政治思想分野で語られる「自由」「民主主義」議論では、往々にして個別の事情―宗教的、文化的背景は捨象され、純粋概念として扱われる。しかし、現状の中東をはじめとした世界各地での民主主義の挫折は各文化圏特有の宗教理念、価値観との衝突でもある。昨今では欧米でも右傾化が進み、移民排除など自国中心主義が進み、「自由」や「民主主義」という概念自体が疑問視されている。このような状況の中で、改めて「自由」「民主主義」の概念を検証する必要がある。それは、政治思想的な純粋概念としてではなく、固有の文化、文脈に即して把握しなければ、実効性に乏しいのではないか。こうした問題意識の元、「自由」と「デモクラシー」が岐路に立つこの時代の状況を背景に、一神教の祖であり、紛争の絶えない中央の一角をなすユダヤ教における「自由」「デモクラシー」概念の検証を行うことを企図した。

２．研究の目的

本研究の目的は、ユダヤ社会における固有のデモクラシーの形態を「デモクラティア」（「デモクラシー」のヘブライ語表記）と定義し、ユダヤ教の「デモクラシー」・「自由」の在り方を、古代から近現代にいたるまでのユダヤ教文献を渉猟し、ユダヤ教独自の「デモクラティア」・「自由」の諸相を明らかにすることである。特に 19 世紀末に成立した近代科学的ユダヤ学の著作を批判的に分析し、本来外来語である「デモクラシー」が「デモクラティア」とヘブライ語化し、どのようなニュアンス・イデオロギーを担うことになったのか、その経緯を明らかにする。本研究は、「デモクラシー」「自由」の概念は普遍ではないこと、絶対是ではないことを社会に発信し、各宗教、文化に見合った「デモクラシー」・「自由」の在り方の模索が必要であることを実証する。

３．研究の方法

Ａ．ユダヤ教文献における「デモクラシー」・「自由」：本来ユダヤ教文献には「デモクラシー」という概念は登場しないので、古代から中世の文献については「民」「統治者」義ギリシア語由来の「デモス（民）」に関する言説、エピソードを収集し、これらの観念の多様な実態を追った。合わせて「自由」の語根にあたる HR、HPhSh の派生語の用例分析、エピソードを集積した。また、個」としての自由の概念の萌芽がみられる金の子牛像（出エジプト記 32 章）の聖書解釈の分析、さらにそれを後代の研究者がどのように分析したかが本研究の後半の焦点となった。

Ｂ．近代ユダヤ学における「デモクラティア」の出現：ユダヤ学の科学的な研究は 19 世紀末のドイツ・ユダヤ学から始まったが、その牽引者であった A.Geiger の著作を中心に、彼らがおかれていた状況の中で、いかに、ユダヤ教内に自由、自立を必要としていたか、ラビ・ユダヤ教文献野中に、どのように自由と自立、デモクラシーのルーツをみようとしていたかを探った。

これらの領域を突き合わせ、ユダヤ教文献の中での「自由」・「デモクラシー」の多様な実態と「デモクラティア」・「自由」のバイアスを明らかにし、その成果をユダヤ社会に発信し、自己批判を促すと同時に、我々自身の「デモクラシー」・「自由」偏重主義への批判検証をすすめた。

４．研究成果

以上の研究方法のもと、各年度において以下のような成果を挙げることができた。

2016 年度は、１.「自由」についての近現代思想史、政治思想史における議論を総括し、2. ヘブライ語聖書、ラビ・ユダヤ教時代の文献における「自由」概念を総括し、3. 比較として、同時代の原始キリスト教の旗手となったパウロの言説における「自由」概念を検証した。１については、今や古典とされるバーリンの積極的自由と消極的自由の自由論を皮切りに、アーレント、フロム、他日本における「自由論」を渉猟した。特に、井上達夫氏の「自由論」(『自由の秩序』(岩波フロンティア文庫)）において、リベラリズムの基底に正義があるべきであること、自由とは秩序のより良い形式であり、秩序、正義と「自由」は密接な関係があるべきという主張は、「律法」という秩序の中で「自由」が想定されているユダヤ教における「自由」を分析する枠組みの示唆を得ることができた。２については、ヘブライ語聖書における「自由」ラビ・ユダヤ教文献の中でも初期に編纂され、その後のユダヤ教の議論の中心となった「ミシュナ」における自由論を再検証し、総括した。双方の資料において「自由」は「奴隷」の対置となる身分を表す社会的用語であることが確認された。３については、ユダヤ教出身でありながら精神的、個人的レベルでの「自由」を主張し、原始キリスト教の牽引車となったパウロの思想を、同時代のユダヤ教の状況、文献から考察した。パウロが置かれたユダヤ教と他者(異教徒）との境界にあっては、同時代のユダヤ教側の文献においても、律法を順守するか否かの選択を個に任されることになり、そこに個人としての「自由」の萌芽が見られた。他者との関係性の中で「自由」の可能性があることは、「自由」を考える上での示唆となった。

2017 年度は、ラビ・ユダヤ教文献における「ディモス」（民）の概念を中心に分析した。「デモクラシー」「ディモクラティア」の語源でもある「ディモス」(民）は、ラビ・文献でも散見される用語であり、民、「ディモクラティア」へのラビたちの印象を知る手がかりになると考えた。その結果、ディモスの用法は、ユダヤ教文献においてはいくつかの用法が著しく不均等に現れることが分かった。500 年までのユダヤ教文献では、(公共的)「建造物」

「墓石」「公衆浴場」の意味で用いられるが、中世以降の文献では、ほぼ「墓石」の意味で用いられるいずれにしても、民主主義としての「デモクラティア」につながる意味では使われていないただし、この「ディモス」からの連想で、為政者が「浴場」などの公共施設を提供する必要があることが説く譬話が散見された。これより、ラビたちが理想とする為政者と民の関係が推定される。それは、必ずしも為政者と民が同等な関係ではない。従って、近現代や 19 世紀のユダヤ学が理想とした、デモクラティア的ユダヤ教とは乖離があることが窺われた。ツンツ、ガイガー、ベックら、ドイツ・ユダヤ学の創始者の著作の分析を続けた結果、彼らが、ユダヤ学をユダヤ民族の自由の実現へのツールであると捉えていること、彼らのユダヤ学構築にあたって、「自由」の体現が通底するテーマになっていることが改めて示唆された。

2018 年度は、「民主主義」を構成する「民」に着目して、ラビ・ユダヤ教文献を中心に、「民」に関する用語の用例分析を行った。『ミシュナ』では、様々な「民」に関わる用例が散見されるが、どれも、民の「分類用語」であり、民、民衆の資質の評価や、「民」として理想像や内実につながるような議論がされているとは言い難い。これは、一つには『ミシュナ』の法規集という文学ジャンルが関係しているかもしれないが、他方で、法規ジャンルにおける「民」「民衆」への関心の欠如は、「民」が治世に関わるという想定はされていないことも表していると考察した。

最終年度となる 2019 年度は、本研究の総括の年として、ユダヤ教聖書解釈における「自由」の概念を中心にまとめた。2018 年度から継続のテーマであった金の子牛像の事件（出エジプト記 32 章）に関して、さらに論考を深め、タルグム（アラム語訳聖書）での金の子牛像理解にも分析を広げた。その過程で、ユダヤ教伝統では、「個」としての自由の概念が、金の子牛像事件のために破壊された石板との連想の上もたらされ、その後長きにわたって両者の結合が今なお続くことから、「自由」の対極には、子牛像に代表される偶像崇拝が想定されていること、また両者が必然的に連想される構造になっていることを指摘した。さらに、研究史を追うプロセスと、またユダヤ学におけるキリスト教像の分析から、19 世紀末のドイツ・ユダヤ学において、「自由」「デモクラティア」に対する切迫した希求の念が明らかになった。特に、ドイツ・ユダヤ学を牽引した A.ガイガーが、その置かれた環境－ユダヤ共同体をドイツ国民の一部として、他のドイツ人と平等な市民として確立させる必要性に迫られていた–ゆえに、ユダヤ教の自由と自治を強く求めていた姿が明らかになった。こうしたバックグランドが、彼らの言説の中で、実際の伝統的聖書解釈テキストではほとんど有意な意味を持たない用語「デモス（民衆）」へのガイガーの強い関心などにあらわれる。ドイツ・ユダヤ学のラビ文献へのアプローチの仕方と、実際のテキストの乖離から、「自由」「デモクラティア」の概念が創出されるプロセスが明らかになった。こうした論考を、学会発表、また論文発表としてアウトプットした。

総括

本研究は、ラビ・ユダヤ教文献、またそれらを解釈する 19 世紀のドイツ・ユダヤ学者の分析を通し、さほど「個人」としての「自由」には関心のないラビ・ユダヤ教文献に「民主性」（デモクラティア）や「自由」を見出したのは、近代ヨーロッパの価値観との競合の中で、一市民としての自立した地位を確立するために、「自由」と「民主性」を火急の課題としたドイツ・ユダヤ共同体の事情があったことが推察された。他方で、伝統的ユダヤ教では、個人としての「自由」の対極に金の子牛像に代表される「偶像崇拝」が置かれていることを

指摘した。これは、特定のイデオロギーへの執着も含め、有形・無形の偶像に拘束されることの危険性を訴えるものであり、この視点は、現代社会において当然視される「自由」概念の再検討に有用な枠組みを提示した。本研究の成果は、研究期間中、毎年、学術論文として発表、また、学会で発表した。さらに、2018 年度には研究会「ユダヤ教の諸相」企画し、そこでの研究論文を論集『一神教世界の中のユダヤ教』（リトン社、2020 年）として編集、出版したことは最大の成果となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Etsuko KATSUMATA	４．巻 XLII-XLIII
２．論文標題 Images of Prophets and Prophecy in the Rabbinic Age and the Wissenschaft des Judentums	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Annual of the Japanese Biblical Institute, vol.XLII-XLIII (2017-2018), pp.7-34	６．最初と最後の頁 7，32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Etsuko KATSUAMTA	４．巻 2017
２．論文標題 Toward Investigation of Democracy in Jewish Thought: Freedom, Equality, and Dimos in the Rabbinic Literature	５．発行年 2019年
３．雑誌名 JISMOR	６．最初と最後の頁 27，44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 勝又悦子	４．巻 12
２．論文標題 ユダヤ教・ユダヤ学から見たパウロ	５．発行年 2017年
３．雑誌名 一神教学際研究（JISMOR）	６．最初と最後の頁 3－21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 勝又悦子
２．発表標題 「ラビ・ユダヤ教文献における『民』『民衆』」
３．学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 勝又悦子
２．発表標題 「ユダヤ教にける『民』『民衆』－出エジプト記ラッバ41章を中心に－」
３．学会等名 ユダヤ教とその周辺
４．発表年 2018年

１．発表者名 Etsuko Katsumata
２．発表標題 The Emergence of Democracy in Jewish Thought
３．学会等名 The 17th World Congress of Jewish Studies（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 勝又悦子
２．発表標題 「北フランスヘブライ語写本「」が伝える中世ユダヤ社会の諸相
３．学会等名 第76回日本宗教学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Etsuko Katsumata
２．発表標題 Interactions among Three Monotheistic Religions through Calendars,
３．学会等名 International Conference Values in Religion (6): Holy Times in Religions, 2nd（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 勝又悦子
２．発表標題 ユダヤ教・ユダヤ学から見たパウロ
３．学会等名 同志社大学一神教学際研究センター「日本におけるユダヤ人・ユダヤ研究」プロジェクト（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 勝又悦子
２．発表標題 初期ラビ文献における異教徒・異邦人・異端者
３．学会等名 日本聖書学研究所（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 勝又悦子、勝又直也	４．発行年 2016年
２．出版社 教文館	５．総ページ数 349(1-232，321-349)
３．書名 生きるユダヤ教―カタチにならないものの強さ	

１．著者名 勝又悦子、小原克博、木原活信、村田晃嗣、塩尻和子、四戸潤弥、森山朗央、平岡光太郎、	４．発行年 2017年
２．出版社 教文館	５．総ページ数 298（1-8，193－229）
３．書名 宗教と対話―多文化共生社会の中で	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考